

## 歌人 安江不空

——葦辺行く鴨の羽がひに霜ふりて寒きゆふべは大和し思ほゆ(志貴皇子)——

小 野 浩

本研究に敢て「歌人」の語を冠したのは、研究主題の限定を示さうとしたからである。蓋し不空は、書、画の領域に於いても、それ／＼一流の業績を残して居り、その評価は、歌、書、画の三域に亘る精究の成果を綜合して決定さるべきものと考へられるのであるから。

## 序 ニイチェ・不空両研究の主題的一貫性について

明治元年から通算して本年(昭和五十八年)は確か百十六年になる筈である。即ち、目標の王政復古は一応達成されはしたものの、新旧両時代の軋轢はなほ止まず、到るところに誘爆の危険な余燼を残しつつも、包囲体勢を固めて押し迫る西欧文明の高潮の勢威と、一刻も速かにこれを導入しようとする内部的熱望に挟まれて、半裸に近い姿で、世界に門戸を全開してから優に百年以上を経過したことになる。もとより、単に百年の日月を閲したといふだけなら、殊更に問題とするにも当たらないかも知れない。然し鎖国一変して全面開国といふことは、奈良期の仏教受容とはまた格段の意味で、未曾有の民族の実験であり、この決定的実験が、日清、日露、第一次、第二次両世界大戦といふ

重大な試練を―或はそれらを克服し、或はそれに屈しつ―透過して兎も角も日本としては、一応の成果を収めながらも、現在の世界的に決定的な廻点に立たせられるに到る重大な推移が、悉くこの百年に含まれてゐるといふ意味で、それはまさに絶類の一世紀であつたと言つてよからう。

ところでこの△一応の成果▽とは何か。それは知性人と称せられる人々が、口々に誇負する日本の△近代化▽といふものに外ならなかつた。成程この△近代化▽は、西欧の末期的文明の急速な消化によつて世界を瞠目せしめる目覚ましい諸々の成果を収め得はした。とりわけ戦後のすぐれた技術の成果による経済的發展には顕著なものがあらう。然しこの所謂△近代化▽とともに、日本の精神的頹廢が致命的境域にまで昂進したことを知悉してゐるものは、まさにここに日本が、危急存亡の窮地に追ひつめられたことも痛感せぬわけにはゆかないであらう。

もとよりこのやうな窮地に立たされてゐるのは、ひとり日本にだけ限られたことではなからう。米ソを始め目下地球上にある国々のすべては、大なり小なり、そのやうな危機に直面してゐると言つてよい。ところでそのやうな危地に追ひこんだ責任者は誰か。それは即ち全地球の△近代化▽を目論んだものたちに外ならない。然らば△近代化▽とは何か。私は前著、「ゲエテの古代的転回」の跋文に於いて、詳細にこれを指摘したから再びここには繰り返へさない。明治以後に於ける日本の△近代化▽も緊密にそれと脈絡すること勿論である。蓋し開国後の日本を近代化したものは、K・レヴェイトの所謂△ヘブライキリスト教的世界否定 (die hebräisch-christliche Weltverneinung)▽のなかから産み出された技術文明と、頹廢した末期文化に外ならなかつたからである。<sup>(1)</sup>

想へば明治開国とともに日本が全面的に対決を迫られた西欧は、ニイチエによつて鋭く指摘されたやうに、まさにニヒリスムスの決定的登場によつて第五幕の幕開けを迎へた時期に當つてゐた。即ち一応ヘブライ的原質を止揚して西欧化された筈のキリスト教も、当初から抱へこんでゐた致命的矛盾に発する間断なき抗争のうち十数世紀の星霜を送迎しながら、次第にその宗教的エネルギーを消耗して行つたが、それとともにその重要な諸々の文化的支柱は漸

次、ヘブライ的原毒を温存してきた白蟻群の侵すところとなり、その空洞化は取り戻しがたく進み、やがて呼びこまれたニヒリズムスの高潮によつてその蒼古な柱礎をつぎつぎに洗ひ崩されつつあつた。

然し開国当初のうぶな日本にとつては、そのやうな世紀末的に頽廢した西欧さへも、未曾有に新鮮な妖しい輝きを放つエキゾチズムのゆゑに、謎多き、夢にみちた入約束の国Vであり、精緻にして密蔵なる科学と、そこに発する魔法めいた技術文明の目覚ましきによつて、容易に窺知を許さぬ畏怖と好奇の世界であつた。一方、西欧にしてみれば、日本は、その処女の如きつつましやかな含羞のゆゑに、おのづから食指の動きを禁じ得ぬ対象でもあつたらう。

かくて舌舐りしながら虎視眈々日本侵入の機を窺つてゐた近代西欧の尖兵となつて開国日本に乗込んできたのは、十字軍以来常套のあの侵略的宣教師の諸群団であつた。それは巨大資本を擁する伝道会社で練つたドグマを叩きこまれたエリート社員たちだが、大別して略々三種類となる。その第一類は、キリスト教の洗礼をうけなかつたので、いまもなほ原始的蒙昧状態を脱しないものと勝手に決めこんだ日本に、彼等の福音をつたへて、これを救つてやらうといふお節介屋たちでその数は相当のものであつた、次に旧世界に於けるキリスト教の行きづまりを新天地日本に於いて打開し、それを新生せしめようと願つた少数派、そして最後にキリスト教の仮面をつけたヘブライーパリスイ的偽教徒で、その数は第一類に比して遜色はなかつたかも知れない。

ところでかの第一類のなかにも、その体内になほ原始のヘブライーパリスイ的原毒を無意識のうちに隠伏せしめてゐるものが少からずあり、相俟つて日本のあらゆる方面にヴィールスのやうに浸透し、その青酸カリにも似た毒素を、当初はそれと気付かれぬ程度まで稀釈し、次第にその濃度を強めつつ、遂に日本民族の民族的生命を麻痺硬直せしめて、これを植民地的搾取の対象たらしめんと図つた。私は決して事実無根の強弁を試みてゐるのではない。これは十字軍以来、アフリカや両米大陸に於けるキリスト教布教史の一端でも知る人にとつて、単なる常識にすぎないであらう。たゞ露骨さを控えてゐただけに、彼らとしては時間を要したと思はれるが、現時点の日本に於いては、彼等の意

凶は略々七〇%は達成されたのではないかと思はれる。

然し当時の日本はまことに多忙を極めてゐて、かの尖兵群の正体を一々弁別してゐる余裕はなかつた。維新以来続発した内乱にも、西南役をピークとして漸く鎮静の目途が付き始めたとは言へ、治外法権撤廃、不平等条約改正の準備も急がなければならず、やつとの思ひで憲法発布に漕ぎつけてみれば、当時なほ入眠れる獅子Vと恐れられてゐた清国は、流石強弩の末裔、なほ残る余勢を駆つて韓国を威圧して自己の橋頭堡たらしめ、これを手頃な七首として日本の側腹に擬し、一氣にその死命を制せんとする野望も露はに、日本に迫りつつあつた。開戦と同時に大本營が広島に移されたことによつても、当時の朝野の心痛の深さは略々想察されるであらう。筆者なほ小学六年生の頃、当時の切迫した国情を語り聞かせながら、祖母が、「日清談判破裂して品川乗り出す〇〇艦……」といふ軍歌を唱ひきかせてくれたとき、歌詞の壮語調にも掲らず、低く抑へられた沈痛な節まわしに、心を扶られるやうな感銘を受けたことを、今もなほ忘れることができない。一旦、死を決して父母の国に別れたからには、再び生きてまみゆる日はないであらうといふ悲痛な思ひが惻々として身に迫るのを覚えたからである。

このやうな沈痛な軍歌からも察せられるやうに、そこには水も洩らさぬ民族士氣の昂揚と雄走りがあり、それが予想外の大勝によつて報はれたのも蓋し当然であつた。

だがそれも東の間、忽ち三国干渉によつて息をひそめた日本は、十年間、臥薪の苦楚に堪えなければならなかつたのである。

然しその耐力にも、おのづからなる限界はあつた。巨大なフランスのなかで加熱された液体が沸騰点に達し、一挙にコルク栓を吹飛ばすのに似て、勝敗の目途もつき兼ねるままに、日本は、当時西欧第一の強大国ロシアに対し眦を決して蹶起したのである。

然し現在の私たちからは想像もつきかねる国論沸騰のさなかにあつて、敢て非戦論を唱へた少数の基督者があつた

ことはやはり注目に価ひするであらう。そこに私たちは早くもキリスト教宣教の最初の成果を認め得るからである。何はともあれそれらの人々には、自己の祖国の存亡よりも、キリスト教的ヒューマニズムの方が重しと考へられたのであり、この信念に準拠して、少数派なることを顧みず、堂々自己の所信を表明したのである。然しそれら勇敢な基督者たちも、所謂新思想に陶醉した観念論者たちに共通なあの致命的錯誤からまぬかれることは出来なかつた、即ちかつて山鹿素行によつて指弾せられた、「耳を信じて目を信ぜず、近きを捨て遠きを取る」学匠たちのあの通病、換言すれば、人類的観点から民族的信情を見降すといふ観念的倨傲ヒュプリスからである。

全東洋吞噬の野望に一切を忘れ去つた当時のロシアートルストイを道塗に窮死せしめ、ドストイェーフスキーに死に等しき流刑を課したロシア—この点についてはソヴィエツトの方が一層悪化してゐると思はれるが—であつても、説くに道を以てすれば耳を傾けてくれるであらうといふかの基督者たちの信念は、殉情的ではあつても、民族の生死を賭した政治的情況と、悠久な生命を包蔵する詩文や芸術との次元的格差を弁へぬ空想にすぎぬと言はれても止むを得なかつたであらう。但、彼らが少数派であることを顧みず、堂々と自己の所信を表明したところにも、また敢てこれを弾圧せず、その所信の表明にまかせた当時の為政者たちの態度にも、明治期の日本人のおほらかさが窺はれるやうに思はれる。

ところで利害を超越して義理人情を重くみるのは、とりわけ江戸封建期に深く根付いた日本の心情の一つである。あの基督者たちが至難な情況のなかにあつて敢へて非戦論を唱へたのは、必ずしもキリスト教的ヒューアニズムのピールといふやうなものではなく、エリート宣教師独特のあの陰にこもつた生真面目な声調に乗つて、深く心耳に響きこんだイエスの教へに、義理をたてずにはゐられない心情から出たものであつたらう。同じく大正デモクラシーに点火して、これを燎原の火のやうに燃え上らせたのも、不消化な共産主義イデオロギーなどではなく、最高学府の神聖な講堂で伝へられた經典「資本論」の著者マルクスを、二なき教祖と仰いだ血の氣の多い青年たちの、打算を超え

た情熱であつた。大正十四・五年頃、当時の二高から思想事件に絡んで大量の検挙者を出したことがあるが、その中に、武藤丸楠<sup>V</sup>の名がみえる。丸楠はもとよりマルクスで、そこまで彼等は心身のすべてを入れあげてゐたのであつた。彼らの情熱はまことに熾烈で、寧ろ<sup>へ</sup>逆上<sup>V</sup>と呼ぶにふさはしく、少しでもそのノボセを下げてやらうと、一寸鋭く切込むと、彼らは情の激するままに、瞳を据ゑ、顔色蒼白となり、ブル／＼身を震はす程で、往々にしてヒステリーの発作を想はせるものがあり、平常誇らしげに口にする<sup>へ</sup>学徒<sup>V</sup>の姿など全く片影もなかつた。口を開けば「資本論、々々々」と言ひながら、その実、数頁でも読んでゐたものが果してどれほどあつたであらうか。精々のところ、ブハーリンの唯物史観教科書位が、彼らの虎の巻であつたのではないか。昭和二十年台の初めに若い左翼の人々によつてよく読まれた詩集「編笠」の著者、ぬやまひろし事、西沢隆二<sup>たかじ</sup>などもこの手のものであつたらしい。彼は大正八九年の頃二高理科甲類へ入学、大正十、十一兩年つづけて原級に止まり筆者は昭和二年、二高文乙に入学したが、このやうな場合は、ドイツ語をもじつて<sup>へ</sup>ドッペル<sup>V</sup>と呼ばれてゐた規定によつて退校この方は<sup>へ</sup>凱旋<sup>V</sup>と称された。司馬遼太郎氏の「ひとびとの足音」によれば、彼は思想犯として昭和九年から廿年まで獄中でしたが、出獄後、四十一年十月共産党から除名されるまで凡そ廿年間、党の要職にあつたのだから、当然、日本に於ける「資本論」の卸問屋の一人のやうなものと思ひこんでゐた司馬氏が、除名後、フト親しくなつた隆二の訪問を受け、談たま／＼資本論に及んだとき、「Iさんが言つてゐたのだが、そういうことが『資本論』に書いてある、それだよ」と嬉しさうにアツケラカンと言ふのを耳にして、この人物の正直さと気楽さに人格的衝撃をうけた、と記してゐる。

私は司馬氏のこの文を一読して、あくまで神話的教祖としてのマルクスに操を立てとほした意味で、むしろ反近代的な、ケレン味のない西沢隆二といふ人物の行蔵に一種の興味を覚えたが、だからと言つてマルクスを教祖と仰いだといふことが結構だつたとは思はれず、やはり時代風潮の致すところでもあつたらうが、単純な好人物であつたらし

いだけに、抽象的妄想のために一生を棒に振つたのではないかと惜まれる。因みに隆二の言及してあるIさんなるものは、彼の好きな農学者でしかも新教の熱心な信者であつたといふ。ここにマルクシストとクリスチャンとの微妙を同穴性が窺はれるやうに思はれる。私としては、イエスの篤信者のなかにも、日本人として信頼するに足る知人を有してもゐて、そこにキリスト教の日本的大乗化の萌芽をみてもゐるわけなのだが、マルクシストもクリスチャンも「新約」だけでなく「旧約」、とりわけ「申命記」を核心とする「モーゼ五書」を精読して、至上神として仰がれてゐるヤハヴェなるものが、どのやうな大魔神であり、「旧約」なるものが、人類の有する怪文書中の怪文書なることの洞察を誤らないで欲しいと願ふものである。

少し岐路にそれたが、ここで再び本筋に話を戻すことにする。

かの先進西欧の宗教思想学術を吸収して、兎も角も日本を一日も早く西欧の水準に届かせようと、寢食を忘れて励精したエリート達の功績はもとより没し得ないが、それらの人々がともすれば選良気取りで庶民を軽くみてゐる一方で、地味ではあるが民族の根幹をなす多数民衆の健やかで素朴な心情は、一旦、ロシア帝国主義の毒牙にかけられたら最後、惨憺たる奴隷状態に突落されるに違ひないといふことを、本能的な確かさを以て感じとつてゐたのである。

私は、明治第一世代に於いてキリスト教の宣教が早くも一個の注目すべき成果をあげたことを指摘した。それは当時の日本人が、己れを空うしてこの新しい宗教を短時日の間に自己のものとした一つの証左でもあると考へたからである。

明治期の日本にとつて開国といふことは、何が何でも西欧の文化と文明を無制限に無差別に摂取することを意味した。何よりも国を自衛する軍制確立を目ざして、西欧の発明にかかる文明の利器を、差当り輸入により、次第に自力により整備製造するために、まづ西欧理工学を習得すること、国家社会体制の確立と国際社会の一員としての地位確保のために、法制経済の諸学も、世界の覇者たる西欧を範として吸収すること、そのために人々は血眼にならざるを

得なかつたし、それらのいづれに於いても後進国であつた日本が、先進の西欧に対して抱く劣等感は寧ろ当然のこととして怪しまれもしなかつた。西欧と言へば即ち八先進国Vであるといふ通念は、昭和の現在に到るまでなほ根強く残りつづけてゐるのは周知の通りであらう。

昔から日本は文化的事大主義のとりわけ顕著な国であつた。異国の文化と言へば、己れを空うして耽溺的崇拜的にこれを喜び迎へ、微に入り細に亘つて有難く味会するが、幾多の星霜を閲するうち、いつの間にかそれら異文化の有毒な側面はこれを消却し、長所は醇化保存して、自己本来の美質に綜合し高昇させてしまふといふ不可思議な国柄なのである。然しそれとともに異文化固有の毒素までも無差別に嘸みこんでしまふために、往々にして致命的中毒症状をまぬかれるわけにもゆかなかつた。奈良文化期に於ける仏教の受容とともに、異質の酵母による醗酵の過程にどのやうな危険が相次いだかを想起してみても、思ひ半ばに過ぎるものがあるだらう。しかもそのやうな危機の突破なくしては、文化の総合と更新は遂げられなかつたのである。<sup>(3)</sup>

そして今や全面開国によつて日本は、全く異質な西欧文化との最終決定的な対決の場に据ゑられる。しかもそれが根柢に於いては世界観の戦であり、生死を賭した対決であるとの意識は、攘夷論者の退場とともに、漸く影をひそめ、仏教受容時代のあの耽溺的崇的態度が、未曾有の規模を以て復活されたのである。かつてイスパニア、オランダによつて代表される南蛮文化が渡来したとき、忽ちそれに魅了された近畿九州の土民たちのあの不可思議な異国文化に対する讚嘆と陶醉とは、北原白秋の邪宗門秘曲にもさながらにうたはれてゐるが、それに親縁な心情は明治大正の六十年を通じ略々同じ濃度に於いてみられたし、現在もなほ舶来品上等イデオロギーとしてその残響をとどめてゐると言つてよからう。

実に人を陶醉させずにはおかぬこの珍奇なエキゾチズムは、燦然たる成果を誇示する科学技術などの実学によつてだけでなく、論理的に精緻なその構架に於いて輪奐の美さへ想はせる哲学によつても、また、直接感能に訴へる音



楽、絵画、彫刻、詩文の全域に於いても、それを嗜好味会する人々を昂奮させずにはおかぬ不可思議な魅力を發揮した。それによつて連れこまれた陶酔境はこれまで全く身に覚えのないものであり、人々は恍然として自己も祖国も忘れ去つたのである。西欧渡来のアルコール類、白秋も唱つたアラキヤチンダの酒、即ちブランデー、ヴァイン、ウイスキー、コンニャク、シャンパン、ジン、ベルモット、リキュール、ペパアミント、ヴォートカ、シェリー、それが何であらうと、西欧のものと言へば、いぢらしいことにそれぞれにふさはしいグラスまで取揃へて、人々は競つてそれを痛飲した。そしてそれらのいづれにも固有な有毒成分が含まれてゐることなど全く意にも介しなかつた。尤も一々警戒してゐては酒の味も索然たるものになつてしまつたであらう。然しイデオロギーと称するカストリブランデーはまことに粗悪な最下級品で、その実質は少くとも三十%までがメチルアルコールである上に、その中にはこれまでに日本が接した異文化のいづれにもなかつた致命的毒素が盛りこまれてゐることなど、全く夢想もし得なかつた。そのやうな有毒な安酒を真理と称して世間知らずの学生達に吞ませた教授連もまた罪なことをしたものである。ああいふものを吞まされては、若い身空では逆上しない方が不思議であつたらう。

かうしてこの一世紀を通じ一筋に近代化を念願した日本は、上述のやうに全く貪慾無差別に、所謂西欧文化を摂取し痛飲した。それに伴つて殆ど致命的と称すべき中毒症状があらはれてきたのも、まさに因果当然と言つてよかつた。

一方、このやうに世紀末的に頽廢的な西欧文化吸収に刺激されて、この民族に独自の強靱な消化力は漸くその本来の機能を發揮し、頽廢期以前の西欧文化の精髓まで味会しようとして試みるに到つたことは、やはり見遁し得ぬ収穫であると言へるだらう。例へば洋楽方面をみても、その本命たる作曲部面は兎も角、指揮者、演奏家などにはすでに一流が輩出しつつあるだけでなく、楽器の製作にも名手らしい人もあらはれ始めた。それはピアノやヴァイオリンなどの洋楽器だけに限られない。例へば三十弦箏を創作したり、孟宗竹のパイプオルガンを組立てる快男子なども現

れ、いささか頼しきも感じさせられるのである。同じ兆候は絵画、彫刻、建築、詩文の諸領域にも看取され得るかも知れない。一方、ダンテ、シェークスピア、ゲーテ、リオナルドオ、レムブランド、バッハ、ベートーヴェン、トーマス・アクィーナ、エクハルトなど、西欧の精髓と目される詩人、芸術家、音楽家、宗教者などの研究や味会も漸く本来の軌道に乗り、優秀な成果もポツ／＼発表され始めてゐることを想へば、将来このやうな貴重な諸々の萌芽を育成して、地球を単位とする世界文化の創造に当り、日本がハ仕手としての責任を果すことができるか、或はそれ以前に青酸カリにも等しいあの猛毒に負けて斃死を遂げるかの決は、未曾有の大機たる今後三十年にかかつてゐるとみてよからう。

何はともあれ、ニイチエによつて鋭く記刺されたニヒリズム的頹廢と崩壞期の十九世紀西欧——知半解のハ知性人Vたちが、無闇に有難がるハ近代西欧Vが、その屍解の過程に於いて放出せざるを得ない毒素は、仔細に弁別して、厳しくこれを排却しなければならぬだらう。例へばこの有毒な気圏から必然の帰結として産み出された共産主義イデオロギーは、やはりヘブライーパリサイ的擬似宗教の一種であり、書記長を法王と仰ぐその冷酷な国家体制は、全地球を人類の墓場と化せんとして、その地均しの役をつとめる無慈悲な大ブルトーザと言へるだらう。一方、多国籍金権集団はそこに、無限に墓石を供給しつづける大トラック群団としてこれに呼応する。

ところで現在の反戦平和論者も表面的には一応、日露戦時代の非戦論者たちと系譜的つながりを持つかとも考へられる。然し両者の間には心情の貴と賤に於いて、同日に語り得ないものがあるのではないか。現在の社共両党の反戦平和論者たちは、戦後参政権を手にした婦人、青年たち、とりわけこの両党のみえ透いた詭弁と詐術——例へばハ南京大虐殺V、ハ悪魔の飽食V等々の嘘構を看破できぬ女子供——年甲斐もなく社共両党のファンと称する熟年老年もその中に入る——などの多数をその傘下に収容し、ブラックジャーナリズムと連動して事毎にデマとデモに訴へて事を決しようとする。明治非戦論者は絶対少数派であつた。現在の反戦平和論者は絶対多数である。そこにはをのづから格差

があるともみてよからう。もとより△反戦平和論▽が、また△多数▽そのものがよくないといふのではない。マフィア的闇黒勢力から自らを守らんとする気概なく、非武装中立の白旗を掲げて、ソ聯その他為体の知れぬ国々に自国を売り渡さうとするのを見遁すわけにはゆかないといふのである。反核運動にしる、ソ聯の核保有だけは別格だが、その他の国々は何が何でも不埒極まるといふかのやうな社共両党の動向はとも正気の沙汰とは受取れないのである。<sup>(4)</sup>

とまれ日露戦の勝利が、忠烈勇武な前線と殉国無私の至情に徹した銃後との緊密な一体化に、プラスXが対応しての成果であつたことに疑ひの余地はないであらう。かう言へばすぐに、△神がかり▽と冷笑したくなるのが、現在の植民地奴隸的日本人の、何とも因果な通病であるが、そこにプラスXが厳存したことは、あの酷烈な戦ひをたたかひ抜いた將軍たちから兵に到るまで、殆とすべての人々が体感した体験的真実であり、あの時代の明治人のゆるぎなき常識でもあつた。当時の精神的情況裡に身を移して考へる能力をもつ人は誰でも、それを追体験することが出来るであらう。歴史的世界直観のためには△追体験 (Nacherleben) ▽といふものが、最も重要な方法論的カテゴリーの一つであることは、改めてデイルタイに教へられるまでもなかつたであらう。

日露戦役の勝利が、どれ程巨大な犠牲の上に築かれたものであるかを、身に泌みて痛感してゐた殆とすべての国民は、一 Cheng 提灯行列なども型通りに行はれたとは言へ、心のうちにしめやかな祈りを忘れなかつた。そしてこのしめやかなさを忘れぬ限り、この勝利はまた文化的勝利でもあつた。それは水子營に於ける乃木ステッセル両將軍の会見に象徴的に現示されてゐるとみてよからう。

然しこの文化的勝利も、第一次大戦や無名のシベリア出兵などと対位的に登場した成金現象や、大正デモクラシーの狂騒曲のうちにかすれてゆき、第二次大戦の敗北と、その結果、強制された植民地奴隸的デモクラシーによつて止めを刺され、完膚なき文化的敗北の底知れぬ泥沼に迂り落ちてゆくことになる。

第一次大戦によつて経済的に、第二次大戦に於いては政治的に覇権を掌中に収め、無気味にもその巨大な影を以て

全地球をかげらせてゐる巨大な妖魔集団は、究極的には宗教的にも制覇を遂げようとして、右手に握つた大資本による不断の強圧と、左手にかざしたマルクシズムによる共産主義革命といふ両刃の兇器を、時にはそのいづれかを戦術的に使用し、時にはフリーメーソン始め、世界の秘密結社員、エリート気取のクリスチャン、〇〇クラブ員などを大幅に駆使してこの双方を連動せしめ、人々を眩惑させながら、地球全体を巨大な渦の中へ捲きこんでゆく。そして日本もまた、いまや、劇しく旋回する漏斗状の大渦心のなかを無間地獄の奈落へと吸ひこまれてゆくかのやうである。

ところでこの戦術的戦略的両輪は互に逆に噛みあふ大小幾千の――その毛細的なものに到るまで――歯車の複雑極りなき組合せによる精緻なメカニズムのもので、尋常の視力をどれ程凝してみても、とてもその全貌を看破し得ぬミステリアスな構造をもつものである。

とは言へ、西欧精神史研究に當つて、もしこの視点を欠くならば、その成果は全く気のぬけたものとなり、遂に泰山を目睫の間に逸し去ることにもなるであらう。

ところで十九世紀西欧にあつてこの点的確に照準し得た思想家こそ、ニイチェに外ならぬことを、筆者が明晰に確認し得たとき、第二次大戦もまさに終らうとしてゐたのである。

爾来謂はば徹宵の哨戒をつづけながら筆者は、これまで西欧の研究者たちも手を触れることを敢てしなかつたニイチェ本来のこの視座を照射しつづけて今日に及んでゐる。

成程ニイチェは所謂ハキリスト教Vとは戦つた。然し彼はイエスその人を弾劾したのではなかつた。イエスの仮面をつけたパウルス風のハキリスト教V―実質に於いてはイエスを磔殺に処したハヘブライ―パリサイ的V偽教と、一応これに抗戦しながら旧約をキリスト教経典から削除できなかったルター<sup>(5)</sup>の致命的中途半端に対しても戦つたのである。

イエスの垂示に本来の意味に於ける大乘性を確認しながら、キリスト教の日本的大乗化の方向を探らうとした壯齡

期の筆者は、略々前後十余年、新旧の神学研究に専心したことがある。流石にかの歴大な Kirchliche Dogmatik は敬遠したが、兎も角、バルト、ブルンナー、ゴオガルテン、シュヴァイツァー、ティリヒ、ベルチャイエフ、ニーグレン、G・マルセル、R・オットオなどの主要著作は殆ど経眼を了し、その骨格は大略了知し得たと考へてゐる。備忘のために試訳したり、筆録した箇所も歴大な量に達したが、後日の記念のためにもと試訳しておいたR・ブルトマンの「信仰と理解」<sup>(6)</sup>所収の論考のうち特に興味を覚えた数篇を先年刊行することが出来た。

私たちは勿論、靖国神社参拝反対デモの常連たるあの一部ゲヴァ牧師連が、日本キリスト教徒の代表者たちであると思へてはゐないが、私としても前記のやうにキリスト教大乘化の道を探らうとする念願は一朝一夕のことではなかつた。青年時代の友人のうちに、家庭事情にでもよるものか、憂鬱ではあるが、心優しい人があつた。仲間に悩みがあれば親身になつてよく聴いてやり、相手の身になつて心からのアドヴァイスを惜まなかつた。イエスの生涯を模範とし、その行蔵に心折を深めてゐるうちに、大学の教育に失望して自ら退学、修道院へ入る準備を進めてゐるうちに夭折してしまつた。まことに痛恨の極みであつた。そのときの痛惜が、キリスト教の大乘化、即ち一切の怨恨感情に無縁な、晴れやかな日本的キリストの可能性を考へてみたい、といふ念願を筆者の心に生ぜしめたのであつた。もとより、キリスト教の日本的大乗化の方向は、これこれであるなどと揚言する意志も資格も筆者にはないが、然し現在日本の所謂クリスチャンのなかに、この程度までも、キリスト教大乘化の道を探らうとしてゐる人は、果してどれ程あるであらうか。ひとり日本に限られたことではないが、所謂クリスチャンの大多数は、イエスのキリスト教と、ヘブライパーサイ的偽教との精緻な弁別もなし得ぬままに、坊間流通のハキリスト教Vなるものを世界最高宗教と臆断して、安価な自慰に耽つてゐるらしくみえる。そしてその間に、予め目星をつけられ、毒酒を以て酔はされたエリート階級の人々が、それぞれの国のどのやうな奥処に配備され、どのやうに巧妙に操られて、陰湿にして戦慄すべき奸謀を熟させて来たか、また熟させつつあるかについては夢想もしてゐないかも知れない。しかしその一端でも聞

知して、その実証かと思はれるものに直面した経験のある人なら、鳥肌立つ思に駆られずにはゐられないであらう。△近代化▽に眩惑されて夢中でこの百年をすごしてきた日本にとつても、これは決して他人事として心おそく見すごすわけにはゆかないかと思はれる。

想へば明治開国と前後して隠密のうちに日本に上陸した悪質にして巨大な白蟻群団は、略々半世紀の間に国公立大学の要所をも占拠し、エリートを負する倨傲な学匠の功名心につけこみ、巧みにこれを操縦し、大正デモクラシーの招牌のもと、怪しげな法学、経済学、社会学等々を売講せしめ、それを鵜呑みにした幹部候補生たちに国家試験を課して、反逆的革命理論をその単純な頭脳に滲透せしめた上、それらを官衙、学界、政界、法曹界、財界、ジャーナリズムのあらゆる分野に配備した。かくてこれら巨大な白蟻群団は、日本といふ蒼古な巨樹の幹枝を蚕食し、間断なくそれを空洞化させてゆく。そして今次の敗戦に雀躍しつつ、この蚕食を最深の根もとまで及ぼさうとしてゐるのである。

かくて末期西欧文化中毒、即ち所謂近代化としての大正デモクラシーの進展に並行しつつ、日本文化の頽廢は、そのあらゆる部門に於いて益々昂進の様相をあらはにしてゆく。

仮りにこれを芸術部門に限定してみても、遅速の相違こそあれ、絵画、彫刻、書、詩歌の夫々に於いて△近代化妄想▽にかされ、有毒ヴィールスを服用するものは増加の一途をたどり、明治末年に於いて明瞭な発病現象を呈する―それまでは一種の潜伏期とみてよい―に到るのだが、大正を経て昭和も五十八年の今日に於いては、殆ど骨がらみになつてしまつたと言つてよからう。然し抽象芸術の粗雑安易な模倣が漸く世に飽きられつつあるのに対応して、それを止揚した上で具象絵画の制作に励まうとする画家たちの動きが活潑になつてきたのは、真剣な反省に発する快癒の一兆候とみてよいかも知ない。

然しそのやうな時代の溷濁した暴流のなかに身を置きながら、毅然たる瞰制の姿勢を崩さず、深邃にして雄渾なる

伝承の真髓を保守しつづけただけでなく、本来の卓抜な抗素を発動し、強靱な免疫性を獲得してかの猛毒を中和し、却つてこれを逆用して日本文化の新たな可能性醸酵の厲機たらしめた殆ど半神的思想はれる天才者たちも極く少数ながら存在した。私たちが日本文化の厳密な伝承と、その常住に新鮮なる展開を憶念するとき、これらの守神 (Genius) たちは、恒に私たちの身边にあつて鼓舞と激励を惜しまないだらう。そのやうな偉大な存在者たちは、詩・書画・彫刻などの領野に於いてもそれぞれ歴々と挙示され得るのだが、ここにはこれを狭く言語芸術—日本に於いてその核心が大和歌<sup>やまとうた</sup>としての長短歌にあることは言ふまでもなからう—に限定し、そこに於ける頽廢の様相にも目を注ぎながら、その底止を知らぬ頽廢のさなかに、人麻呂以後の第一人者として輝ける歌業を結実せしめた安江不空の香高き風姿を簡潔に素描しておきたいと思ふのである。

ところで伝統の保守とか、それへの随順とかいふ言葉に接して、人或は直観の閉鎖性と思惟の硬直性を連想するかも知れない。然し真の根源といふものは無限に動的な滾湧のうちに保たなければならない。そしてこの無限に滾湧して止まない根源は、その常住の滾湧に於いて一筋の流と化しつつも、その不断の流動のうちに源流本来の清冽性を保持しつづけるであらう。一体それはどこをどのやうにして流れてゐるのであらうか。かつてハイデガーがヘルダーリンの「帰郷 (Heimkehr)」をとり上げて、この問題を詳論したことがある。私としては必ずしも納得しがたいところもあつたので、一九六七年、この卓抜な思想家を訪ねてその真意を質したとき、目下さらに精究中とのことで、タイプに打つた厩大な草稿を呈示せられた。流石のハイデガーにとつても、この問題は難思議中の難思議であつたらしい。<sup>(7)</sup>これは哲学的思惟の類を以ては到底窺ひ得ない境地かと考へられる。よつて筆者はここに、ささやかながら一個の象徴的景観を点出して、この秘邃の境域を髣髴するよすがとさせてもらひたいと思ふのである。それは略々五十年ほど前、千葉県N市に住んでゐた親戚の老人から耳にした話であるが、この老人の温顔を髣髴してもらひたいので、話の部分は一応、言文一致体でのべることにしたい。

この老人の家は旧幕時代以来の由緒ある旅館業で、団十郎はじめ梨園の名流を常客としてゐました。この家に井戸が二つあり、一つには良質の水が湧きますが、何分、量が乏しく、ともすれば涸れ勝ちなので、料理などのほかは余り使用せず、大切にしておきました。もう一方は水量は極めて豊富なのですが、多分に金気をふくみ、浴用、撒水用以外には余り役に立ちません。水槽に張っておくと、赤くなつてしまふので、こんな水で料理までしてゐるのかと思はれてはと、気に病んだ主人は、東京に鑿泉さくせんの名手がゐると教へられて、思いきつて深く掘つてみることにしました。

その名人は、多年の勘で、掘る場所を相あひし、高くがつしりした櫓を組んで作業にかかりました。一定の深さに到達すると、その土質と水質を檢しらべ、さらに下へ下へと掘り進みます。そして略々百メートルのところ、遂に厚い岩盤にぶつかりましたが、これを掘りぬけば、良質で豊富な水があるだらうといふので、遂に厚く堅い岩盤を掘りぬいたのです。まさに予感のとほり、殆ど無限と思はれる豊富で良質な水脈にぶつかりました。

雀躍した主人は、長い長い鉄管の尖端を、極く目のこまかい金網で包み、その上を幾重にも棕櫚で捲き、それを岩盤の下の地下水脈におろし、モオタアで水を地上に誘導しました。水は滾々として昼夜をわかつたず湧き上げてきます。夏など、それをコップにみたすと、そのガラスが曇るほど冷く、これを口にふくめば、その爽かな風味は言ひやうもありません。茶によく、吸物によく、あらゆる料理が格段の風味を加へます。これを浴槽にみたすと、澄みとほて碧玉の如く、△みづいろVとはまさにこのことかと思はれました。その肌ざわりも極く自然でやわらかですが、今まで使用してゐたタオルの鉄気で赤くなつたのがいつの間にかとれ、もとの生地の色に帰つたのには家人一同も感嘆したものでした。そして、炎天つづぎのために、あたりの井戸が涸れるやうなことがあつても、この泉の豊かさには少しも変りはありませんでした。

かうして家人も客人もこの水を楽しんで十二三年がすぎました。然し大学の工学部を卒へた長男は、ごく内気な性質で家業には向きませんし、主人夫婦も老境に入りましたから、思ひ切て代々の家業を止めて上京することになりました。



た。ところでこの掘りぬき井戸—と言つても導管の尖端が地上に出てゐるだけなのですが—を携へてゆくわけにもゆきません。それで後を引受けてくれた人に、呉々もこの稀代な井戸を潰さず活用されるよう、念を押して頼んでおきました。

しかし、このやうな水の有難味がわからなかつたものか、その人は増築の必要上、惜気なくその井戸を塞いでしまつたのです。すると工事中の或る日、屋根で仕事をしてゐた瓦職人が、足を踏みはづして地上におち、その場にあつた大工さんの道具箱に足を突込み、鋭利な鑿のみで足裏から甲までつきぬく大怪我をしてしまひました。

ここまで語つてきて老人は、あれは、あんなよい井戸を潰した崇りに違ひありません、と言つて、ホッと一息ついて、その井戸の想出に耽つてゐるらしく、暫らく沈黙をつづけてゐました。

以上は老人の話を書きとめておいた筆者のメモの紹介であるが、かういふ話はとりわけ珍しいものではなく、同じやうなことを耳にしたり、体験した人も少くないと思はれる。然しこれを譬喩として眺めると、そこには意外に深い意味がひそんでゐるやうに思はれる。

日本精神史が、否定即肯定の意味に於ける文化層の推移交替のうち、非連続の連続として微妙な重層性を現示してゐることは、和辻哲郎氏なども指摘してゐる通りだが、(8) 私たちが幾重にもたたなはる、この複雑な文化の積層を貫穿してボーリングをおろしてゆくとき、遂に突当るあの岩盤は歴史的にはどのあたりに存在してゐるのであらうか。

ここは諸家の見解の岐わかれるところであると思はれるが、聖徳太子あたりにそれを比定することは必ずしも不当ではないであらう。あのころにはもう一種の岩盤のやうなものが出来てゐたやうであり、それが時代の進展とともに、諸々のエポックを刻んで積層されてゆく文化諸層の不断の重圧をうけて、次第にその密度と硬度を増し加へたものと思はれる。あそこには明かに「古道」の一筋の時代からの断絶が感ぜられる。「古道」の真髓が如実に伝へられてゐたな

ら、太子のやうな絶類の天才が、あのやうなことで済まされた筈はないといふ意味のことを、筆者が先師友清観真翁から承たのはすでに三十数年以前のことであつた。

ところで近年に於ける考古学的探究の進展は目覚ましく、その視線は凡そ一万年近く前に向けられてゐるやうだが、所謂科学的研究の性質上、形而上学的視点は初めから排除してかかつてゐるので、幽深な古道といふやうな問題とは本質的な關係をもたない。但、この方面の探究にも有力な手がかりを供給してくれるから、不断の注視を欠いてはならないと思はれる。日本古代史の研究などもその刺激をうけて最近とみに活性を帯び、一旗組の才人たちの奇想妙想入り乱れ、まことに賑かな光景を呈してゐるが、筆者としては功名心に富んだ学匠たちの機心に発する思ひつき論には余り関心をもち得ない。然し縄文中期へ照準を定めた宗左近氏の詩人的直観には期待もした興味も抱いてゐる次第である。<sup>(9)</sup>

とまれ明治から大正を経て昭和初期のころまでは、古道を踏みわけて聖徳太子まで溯るのが精々のところであつた。黒上正一郎、三井甲之の両氏などはその最も勝れた先達であつたらう。この二人を先蹤と仰いで、聖徳太子―親鸞の線に、日本文化の精髓を看取し、砦としてそこにこもつてゐる八国民文化研究会(通称国文研)の人々は真剣である。然し日本の文化は聖徳太子とともに始まるかのやうに思ひこみ、この基準にあはぬ一切に対しては、往々にして拒否反応をみせるやうだが、その日本指向はやはり一種の閉鎖性を免かれぬやうにも思はれる。その心情の純潔にはもとより疑の余地はないとしても、古代日本風に豪放にして清朗な笑ひがみられないのは何故であらうか。行住坐臥、皆を決して生きることだけが、真の生き方でもないだらう。そこにはどこか硬直したところがあり、不自然さがあると思はれる。一跳思ひ切つてあの岩盤をぶち抜いてみたらどうか。仏教や儒教などのために造成されたらしいあの岩盤を。<sup>(10)</sup>

亀井勝一郎の奈良風物誌や聖徳太子論なども、教養組としてはまあ／＼の出来栄えと言へようが、その亜流者たち

の奈良文化指向となれば、滔々として受動的な享受となつて流れ去つてしまふ。それらの人々の奈良文化鑑賞は、例へば大和古寺に一泊してドテラに寛き、湯豆腐に原酒と称せられるもので一杯やりながら、旅人の「讃酒歌」に現代感覚を嗅ぎつけて喜んでゐるやうなあどけなきが感ぜられる。然し宣長の「山桜」はソメイヨシノではなかつた。

近代人としては小林秀雄が、本居宣長を足がかりとして敢て古道踏破の峻嶮を試みようとした。然し詳密な探究の余に成つた大著、「本居宣長」も、あの段階では、世人が嘆賞する程に筆者は感心しなかつた。近代人の次元内から宣長を眺めようとしても、宣長に於ける決定的な点としての古代性はやはりまだその視界内に入つてきてゐないと思はれたからである。

然しそれが無駄であつたといふのではない。あのやうな地道な研鑽を積み重ねてゆくうちに、流石は小林秀雄、次第に宿命的な近代性を脱却して行つたらしく、その眼睛が日本人本来の清涼味を加へてきたことを、私たちは「補記」に到つて略々確認することが出来るだらう。遂に彼も蒼古の古神山を眼かひに仰いで立ち得たかと思はれたが、現世に於ける彼の寿命はそこに尽きた。流石の小林も記紀万葉についての研究は手つかず残さざるを得なかつたといへ、何と言つても、無類の秀才、遂に「近代性」を超脱して、古神山登攀の足固めをなしとげたといふこと、これはやはり、「近代」的瘴氣に於てられて、濃霧のなかを行きなやむ世紀末の同胞のための彼の心をこめたプレゼントであつたかも知れない。人はこの厚志を無にするやうなことがあつてはならないであらう。彼に結縁した知性人も少くないやうだが、それ／＼自己の近代性などにいつまでもこだはることなく、彼が達し得た地点のもつ意義を誤りなく確認し、そこに鞏固なベースキャンプを張り、かの幽深なる泉源を抱く山頂へ向つて一刻も早く登高する準備を整へなくてはならない。維新近く国学四大人の尽瘁によつて、この古道はまさに開通の期を迎へようとした。そのとき、全面開国を好機として侵入してきた妖魅集団と、その手で訓練を施された国内の意識無意識の叛逆者たちは手をとつてあつて、そのやうなものは塞いでしまへ、潰してしまへ、と大声に疾呼しながら、この一筋の貴重な道を荆棘の

荒蕪に委せ去つたのである。知性人としての小林秀雄の功績は、青年時代に吸込んだ体内の近代的諸毒を、或は蒸溜し或は消却しつつ、遂には近代性を腑瞰する高処に達し、古道の啓開を目ざして単身立向つて行つたところにある。然しその仕事に於いては漸く第一段階に着手されたにすぎない。一方、妖魅の勢威は時を得て猖獗を極めて居り、その黒雲はまさに日本全土を蔽ひつくさんとする観がある。「霜を踏んで堅氷到る」——開国以来まさに百十六年、事態は断じて容易の観を許さず、諸般の情勢から考へて、今こそ日本は真に有史以来の危機に直面したやうである。万一、日本の幽真な泉源が塞がれてしまふやうなこともあれば、遂には地球の壊滅といふことも避けられないかも知れない。私たちは究極に於ける妖魅の自潰を確信してはゐるが、それに先立つて、日本及び日本人自身のカタルシスの日——天変地異なども含めて——が来るかも知れない。然しそのやうなカタストローフェの到来を覚悟しつつも、人はいたづらに殺氣立つてはならないだらう。真に心ある人々は、厚く神明の加護を敬信し、かの幽深な泉源に発する諸々の清流の一つ——それ／＼の身にゆかりある——にでも浴し日々、垢穢を祓除して身心を浄め、国土、同胞の安泰を祈念すべきである。安江不空は自身そのやうな「清らかなせせらぎ」の一つであることを自覚してゐたゆゑにこそ、時代の濁波濁流の上に高く身を標置し、よく無名にして八十余年の生涯を断送したものであらうか。人はこの一筋の清流を溯つても、かの泉源を髣髴し得る地点に達することは不可能ではないだらう、それに目のあたりまみゆるためには、やはり決定的飛躍を要求されるとは言へ。

吉野なる夏実なつみの河の川よどに

鴨ぞ鳴くなる山かげにして

——湯原王芳野作歌一首——

(昭和五十八年九月廿七日)

〈注〉

1 これについては、拙著、「ゲエテの古代的転回」(三修社刊、第二版)所収、「ゲエテの世界観について」(二三九—二七七)参照。また同社刊、拙著「若きニイチェの識られざる神」(昭和五十三年第二版)参照。

2 司馬遼太郎「ひとびとの登音 上」(中公文庫、一一八頁)。

3 拙著、「若きニイチェの識られざる神」(四三—四六)。

4 これについては、一九六一年の結成大会から六八年までの八年間、核禁会議議長の任にあつた松下正寿氏の見解が妥当なものと考へられるので、大略のところを紹介しておきたい。

氏の問題の核心は、いかにして核禁運動を進めるか、といふことよりも、人類の滅亡につながる核戦争を、いかにして避けるかといふところにあつた、ひとりアフガンの場合に限らず、チェコ、ポーランド、ハンガリーの場合などを総合してみても、ソ聯が侵略国であるといふことは歴然たる事実で、理論的推理の結論ではない。体質的に侵略者であるこの国は、いつ西欧を、また日本を侵略するかも知れない。いかにしてそれを防ぐか。一つは予め「非武装中立」の白旗を掲げておくこと。それは西欧にしても日本にしても全面的共産化、即ち滅亡につながるから、それが厭なら、侵入は何としても防がなければならぬ。然し一切の道理は始めから無視してかかつてある国なのだから、非を責めてみても断じて埒はあかないだらう。但、ソ聯は、「力に対する対処には非常に敏感」で「絶対に計算無視の戦争はしない」国なのだから、侵入した場合は非常な損害を蒙るぞ、といふ損得勘定をしつかりさせるだけの備へをば、ソ聯の侵入は避けられる。これが戦争抑止力といふものである。この意味で日本も、ソ聯の侵入による亡国の憂き目をみないためには、最少限度の抑止力としての核兵器をもつことは避けられない。何も米ソ両国に伍して戦術兵器としての核兵器をもつ必要はない。即ち他国を侵略するための戦略的核兵器をではなく、侵略を防ぐために必要にして最少限度の戦術的核兵器はもたなければならぬ。以上が松下さんのご意見でまことに妥当なものと思はれる。非武装中立などといふ観念論的妄想は、生臭い共産青年の空想としてならまだしも、頭髮の白くなりはじめた壮年者としては正気の沙汰とは受取れない。そんな夢に騙まされては結局、泣を見るのが落であらう。「核兵器廃絶の叫び」—核禁会議二十年史、一三二頁—一三六頁—参照)。

5 Ludwig Klages : Die psychologischen Errungenschaften Nietzsches. Zweite Auflage (1930). Zweiter Abschnitt. XI. Kapitel. <Zur Psychologie des Christentums. (S. 147—157)> 参照。

6 Rudolf Bultmann : Glauben und Verstehen. (3 Bde. 1954—1960)。

拙訳は昭和五十六年、新教出版社刊の「ブルトマン著作集第十二巻、神学論文集Ⅱ」に、一応、山岡喜久雄氏との共訳として収められてゐる、然し翻訳の責任は、全面的に筆者の負ふところである。

7 拙文、「ハイデガー先生の想ひ出」(昭和五十六年、城西大学「人文研究」所収) 参照。

8 和辻哲郎、「続日本精神史研究」(岩波版六七頁―六九頁)。

9 宗左近「私の縄文美術鑑賞」(新潮選書)。

10 「古事記上巻」、天岩門開きの段参照。